

「見立てる力」を重視した ソーシャルワーク実習

土岐春奈（日本社会事業大学 社会福祉学部福祉援助学科4年）
関口直志（東京都同胞援護会 立川福祉作業所副所長）
上村勇夫（日本社会事業大学 社会福祉学部
社会福祉士実習教育センター准教授）

発表の趣旨

- 比較的重度の知的障害のある人が通う施設（生活介護事業所）での実習。
- 学生の経験の少なさ⇒戸惑い、プレッシャー
- 180時間（23日間）という限られた時間の中、どのような能力を磨くべきか？
- 「見立てる力」を重視した実習指導、実際の実習、実習先から見た評価を踏まえて考察する。

実習先の概要

- 知的障害のみ(自閉症含む)もつ利用者14名。うち、言葉でのやりとりが難しい人10名。
- 知的障害と身体障害を併せ持つ利用者26名(車いす利用)。うち、言葉でのやりとりが難しい人18名。上記と合わせて合計40名が登園。
- 利用者年齢18歳から51歳。平均年齢35歳。
- 全員家庭に家族と同居。登園に際しては、送迎バスを利用。

3

実習先の活動内容

- コロナ禍にあり外食や買い物などの活動は中止。
- 散歩やドライブなどの外へ出る活動。
- ストレッチや他動運動・歩行器を使用したトレーニングなど身体状態の維持に向けた取り組み。
- 陶芸や機織りなどの創作的な活動。
- セタイベントやクリスマス会など季節に応じたイベント活動。

4

実習生の印象

- 明るく元気な挨拶。
- 利用者とも職員とも積極的なコミュニケーションをとる。
- 小さな出来事にも気づくことができる。
- 気づきを職員に尋ねることができる。
- 尋ねるときに、「自分はこう思う」と話すことも併せて話すことができる。

5

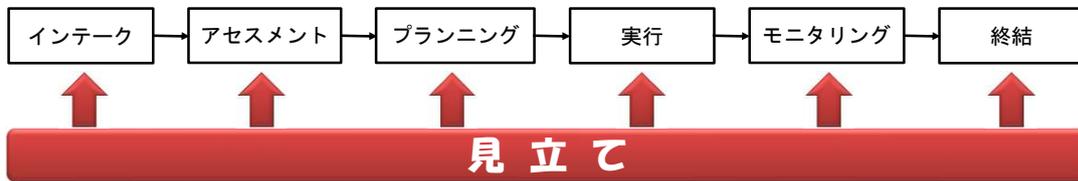
本実習先で学ぶべきポイント

- 生活介護施設のソーシャルワーカーに求められる能力
= **実習生が学ぶポイント**
 - 非言語的コミュニケーション
 - 家族等、生活背景を含めた利用者理解
 - 将来の生き方、支援についてのアセスメント、プランニング、インターベーション
 - 地域とのかかわり、クライアントの社会参加の支援
- 大切な学ぶべきポイントは、実習生にとっては「目に見えにくい」。
- さらに、一方的に教わるものではなく、実践の中で学びを掴み取る必要がある

6

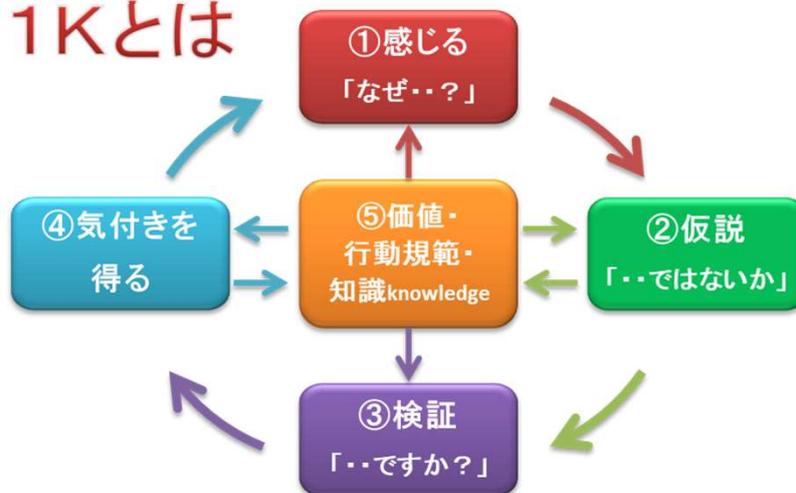
「見立て」とは

- 「見立て」
= 「状況の中から、推測、判断し、考えを構築していくこと」



「見立て」→見える化！ 重要な思い・背景・意図・価値

4K+1Kとは



実習記録1日目 (実習生による「見立て」⇒学び の例)

テーマ	利用者にとっての環境変化の影響
エピソード	水分補給時。目隠しをしてお茶を飲んでいました
疑問	なぜ視界を隠すのだろう？
仮説	不安になるのではないかと。
検証	【職員に質問】視覚情報を隠すことで集中できる。さらに少しの変化で筋肉が緊張して気管に入ることもある人と分かった。
気づき	少しの環境変化や日々の体調によって、危険な状況になる人もいます。それゆえに、支援内容も大きく変化します。今後も利用者の様子に注意したい。
価値・行動 規範・知識	
メモ	実習生らしいオーソドックスな学び。

9

実習記録19日目 (実習生による「見立て」⇒学び の例)

テーマ	地域交流のきっかけを作る大切さについて
エピソード	外出企画。利用者もうれしそう。
疑問	外出の意義は何か？
仮説	利用者の楽しみや経験につながるのでは。
検証	【職員の話】地域の人々に園のことを知ってもらう機会になる。利用者に何かあったとき、地域の人にあらかじめ知ってもらっていると安心。
気づき	利用者は地域で生活していく。だからこそ地域の人たちに知ってもらうこと、何かあったときに助けを求めあえるつながりが必要。
価値・行動 規範・知識	
メモ	利用者への視点だけでなく、地域とのかかわりの視点を持つことができた。

10

実習記録21日目 (実習生による「見立て」⇒学び の例)

テーマ	試行錯誤の実践の大切さについて
エピソード	個別支援計画の実行
疑問	口を閉じることが難しいAさん。口を閉じる練習のためにどのようなことができるか？
仮説	袋にデコレーションをしてもらい、ストローで息を吹き込んでもらうことで練習になるのでは
検証	【仮説の試行】 息を吹き込む練習も楽しそうに取り組めた。正直どこまで有効かわからないが、実行してみて得られるものが実感できた。
気づき	小さなことでも、 実践⇒修正⇒継続＝支援 になる。
価値・行動 規範・知識	利用者本人とも共有して一緒に取り組んでいくことも大切。
メモ	実践的な検証

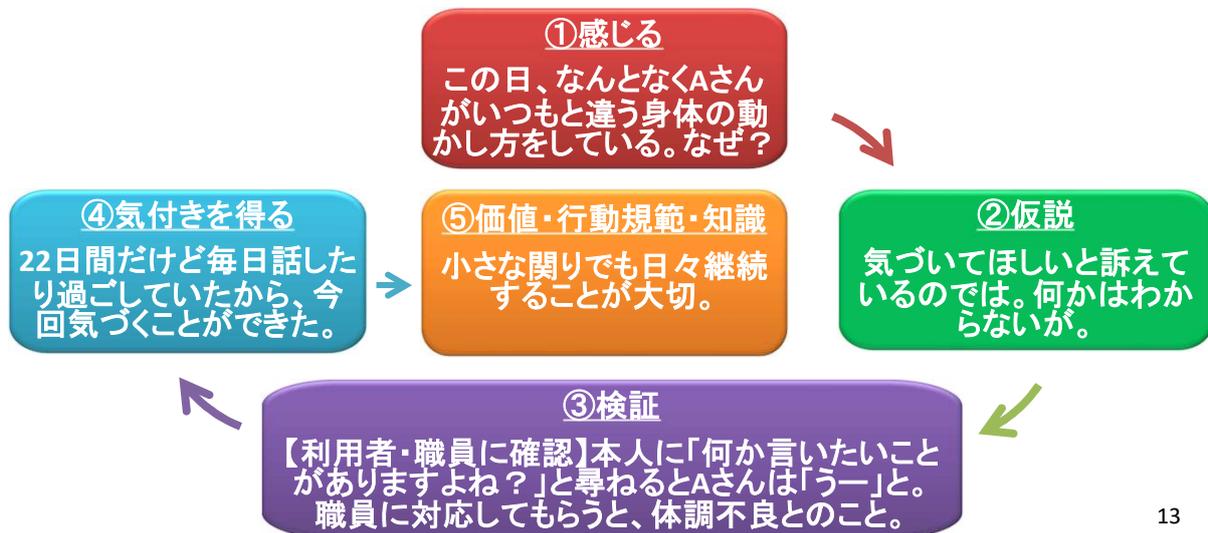
11

実習記録22日目 (実習生による「見立て」⇒学び の例)

テーマ	利用者との継続的な関わりの重要性
エピソード	発話がない利用者Aさん。「うー」と答えることや身体を動かし伝えている。
疑問	この日、Aさんがいつもと違う身体の動かし方をしている。なぜ？
仮説	気づいてほしいと訴えているのでは。何かはわからないが。
検証	【利用者・職員に確認】 本人に「何か言いたいことがありますよね？」と尋ねるとAさんは「うー」と。職員に対応してもらうと、体調不良とのこと。
気づき	22日間だけ毎日話したり過ごしていたから、今回気づくことができた。 小さな関りでも日々継続することが大切。
価値・行動 規範・知識	
メモ	時間の蓄積ゆえに気づけた学び。

12

【体験・エピソード】
発話がない利用者Aさん。普段は、「うー」と答えることや身体を動かし伝えている。



13

実習生の学び

- 今回の実習を通して利用者とのコミュニケーションのとり方や関係性づくりの難しさを実感した。
- 継続したかわりを持つから気がつけることが多くあるのだと知った。また支援は利用者のためにあり、利用者と作り上げていくものだと感じた。
- 支援者は多様な視点から考えられるもの、見えてくるものを大切にして、利用者とは日々向き合っているのだと知ることができた。
- この実習での経験を活かして、今後のソーシャルワークの学びを深めていきたい。

14

実習先の評価

【実習生に対する評価】

- 小さな出来事へ疑問が持てる人。
- 自分なりの考えを持って、それを確かめることができる人。
- 積み重ねの中から新しい気づきを見つけられる人。

【見立てる力を重視する実習について】

- 疑問までは思い付く人は多い。自分なりの仮説を持って職員と対してくれる実習生は、職員に対しても大きな刺激。
- 福祉にとって大切な価値の言語化を意識して行える。学生の学びの深さを指導側が理解しやすい。

15

まとめ

- 「4K+1K」の枠組みを意識して、自ら体験し、考え、さらには、実習指導者や教員との話し合いを通して、「見立て」をより確かなものにしていく。そしてそれが学びになる。
- 「見立てる力」は、プロになっても求められる基礎的な力。
＝ソーシャルワーカーにとっての「キー・コンピテンシー」

16